

図書館情報学橘会会報 第3号(通号9号)

2006年3月発行 発行者 社団法人茗溪会支部図書館情報学橘会

今号の目次	図書館情報専門学群は情報学群へ改組	1
	橘会 公式ホームページ 華麗にリニューアル	2
	卒業式を迎えられた皆さんへ	5
	遠藤龍二先生を偲んで	6
	廣瀬賢次先生、安らかに	10

筑波大学学群改組で

図書館情報専門学群は情報学群へ改組

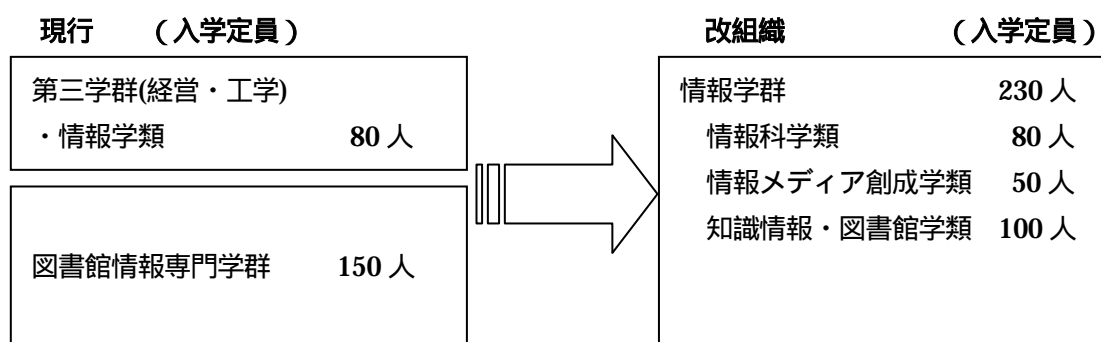
筑波大学は、国立大法人化を受けた「将来設計」の中で学群・学類改組の検討を掲げてきたが、平成17年7月21日の役員会において、「新たな学群・学類の編成」が決定された。

新学群・学類の編成による教育は、平成19年度から実施される。既に、平成18年度入学者選抜試験要項において、そのことが予告され、筑波大学のホームページでは、平成19年度入学者選抜試験における各学群・学類毎の試験科目などがアナウンスされている。

「新たな学群・学類の編成」によると、「図書館情報専門学群」は、平成14年10月の筑波大学との統合により設置されて以来4年半

を経て、再び新たな編成を迎える。新たな編成では、21世紀の情報化社会を迎え、従前、筑波大学の第3学群に設置されていた情報学類と統合し、入学定員230人を擁する「情報学群」となる。「情報学群」に、「情報科学類」、「情報メディア創成学類」、「知識情報・図書館学類」を設置する。従来の図書館情報専門学群の教育内容は、「知識情報・図書館学類」と「情報メディア創成学類」の一部に引き継がれることになる。

なお、今回の改組により、筑波大学のいわゆるナンバー学群は廃止される。



橘会 公式ホームページ 華麗にリニューアル

<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/tachibana-kai/>

同窓生みんなで作ろう！ “ 会員の広場 ”

橘会会報第2号(通号8号)でお知らせしたように、橘会では、昨年7月、橘会が筑波大学の同窓会組織である茗溪会の支部として正式に認定されたことを機会に、“ 社団法人茗溪会支部 図書館情報学橘会 ” の顔として、全く新たに「橘会」の公式ホームページ” を開設した。

今号では、「橘会ホームページ」を皆さんにより親しんでもらい、多くの同窓生が活用し、顔見知りの同級生はもとより、まだ会ったことのない先輩や後輩と情報交換をし、今後の交流に大いに役立ててもらいたいとの願いをこめて、「橘会ホームページ」の色々を紹介したい。

タイトルバーがブルーの訳



この会報では色が見えないのが残念だが、新規ホームページのタイトルバーには、鮮やかなブルー地に「社団法人茗溪会支部 図書館情報学橘会」の文字が流麗な草書体で白く浮き出ている。もちろん英文名「Tachibana Alumni Association of Library and Information Science」という文字もスタイリッシュなイタリックでブルーの中に浮いている。

読者諸君は覚えているだろうか。鮮やかなブルーは、図書館情報大学のスクールカラーだ。校旗の色だ。このタイトルバーを見ただけでも、新しい橘会公式ホームページにかけられる橘会理事会の意気込みが伝わって来るようだ。

そもそも、橘会理事会がこの新しい橘会ホームページの立ち上げを決意した大きな理由は、平成12年10月に長年分裂して存在してきた二つの同窓会、図書館職員養成所から図書館短大へ引き継がれた“橘会”と新制図書館情報大学の“同窓会”が図書館情報大学創基80周年・創設20周年を機によやく1

本の同窓会組織に統合したのだが、それもつかの間、平成14年10月に図書館情報大学と筑波大学が統合されることとなったのが大きな要因だ。その上、平成16年4月には、国立大学法人法の施行により、図書館情報大学が完全に廃止され、統合後も存続していた図書館情報大学の学生全員が法人化された筑波大学図書館情報専門学群または大学院図書館情報メディア研究科に移籍されることとなった。このまま手をこまねいていると、筑波大学図書館情報専門学群等の卒業生は、また別の同窓会組織を作る状況になり、大正10年設置の図書館職員養成所の卒業生以来、80年に及ぶ同窓生の連帯の輪が断絶されかねない状況となった。そこで、橘会は、精力的に、筑波大学の同窓会である茗溪会と調整を図り、大正10年以來の伝統を持った同窓会組織である“図書館情報学橘会”をそのまま社団法人茗溪会の支部として認定してもらい、活動を継続することになったのである。

そして、既に社会の多方面で活躍している80年の伝統を持つ卒業生と、21世紀社会に

新しく飛び出す筑波大学図書館情報専門学群等の卒業生たちの Power を結集するための強力な場として、この「社団法人茗溪会支部 図書館情報学橋会の公式ホームページ」を立ち上げたのである。

つまり、タイトルバーのブルーは、同窓生達の Power の結集を象徴しているのである。タイトルバーの直ぐ左下に、この経緯が簡潔に書かれている。

ところで、タイトルバーの右下に、目立たない白色の花の写真があるのにお気づきだろうか。これが橘の花だ。“橘会”という名の由来は、上野にあった図書館職員養成所の庭にあった橘の樹に由来している。橘はミカン科の常緑樹だが、古

来より香気ある樹として親しまれ、この樹のように常に緑なす生命力にあふれて人生を生きることを願って、図書館短大の庭にも植えられた。図書館短大が上野から世田谷区下馬に移転する際にも移植され、図書館情報大学が筑波の地に新設された際にも、下馬のこの樹が筑波に移植され、今でもつくば市春日の地で緑の葉と白い花を見せている。冬には黄色い実がなるそうだ。実は、すっぱくて食べられないそうだ。このホームページの橘の写真は残念ながら筑波のそれではないが、理事の一人が、ネット上で最も美しいと感じた写真を、元の掲載者の許可を得て掲載しているものだ。

同窓生交流 メインページは“会員の広場”

[ホーム](#) [会員の広場](#) [橘会について](#) [母校の今・昔](#) [会員の皆様へ](#) [入会案内](#) [会報](#) [ギャラリー](#) [関連リンク](#)

タイトルバーの下にはメニューバーのボタンが並んでいる。9つのボタンから導かれる各ページは、どのページも橘会ホームページの重要なコンテンツだ。しかし、同窓生にとって最も重要なページは“会員の広場”だ。このページを見ると、同窓生たちが、今、どんなところで、どんな活動をし、どんな仕事をして、あるいは、どんな趣味活動をしているかが、具体的によくわかる。会員同士の集まりや、連絡に大変便利なページだ。

“会員の広場”のページを開くと「このページでは、会員相互のコミュニケーションに役立つコンテンツを提供しています。」という案内があり、その下に”イベント・会合情報”と”同窓生ホームページリンク集”へのリンクがある。

イベント・会合情報

「イベント・会合情報」を開くと、たとえば“1985 卒業生会合”や“茗溪・筑波グランドフェスティバル”への参加呼びかけの記事が載っている。昨年 12 月に開いたばかりのペ

ージなので、実行ベースの記事はこの 2 点が最初だが、今後、卒業生の皆さんが、同期生たちに呼びかけたいイベントや、卒業生が実施しているイベントで広くインターネットで案内したいイベントを、どしどし掲載してくれると、役に立つホームページになっていくだろう。たとえば、“クラス会の案内”、たとえば、勤務先の“図書館・美術館の展示会の案内”など、アイデアを絞ってほしい。卒業生であれば誰でも、氏名と卒業年・学校名を明記して記事を投稿することができる。書き方は自由だ。

同窓生ホームページリンク集

”同窓生ホームページリンク集”を開くと「このコーナーは、同窓生によるホームページのリンク集です。原則として、同窓生が発信している、もしくは紹介されているホームページを掲載します。」とアナウンスされている。そして、“学校関係”、“自治体関係”、“会社・事務所等”、“個人・趣味・サークル等”といったジャンルに分かれてコンテンツが

案内される。このページも、昨年 12 月に提供を開始したばかりである。しかし、こちらは多数の同窓生の協力により、イベント・会合情報に比べれば豊富なコンテンツが掲載されている。ここでは、同窓生自身が開設しているホームページの他に、同窓生が所属し、そこで仕事や役割を果たしている組織のホームページが数多く紹介されている。

たとえば、“学校関係”を覗いてみよう。現在のところ大学関係がほとんどだが、大学の中の、教員部門、運営部門、国際交流部門、情報部門、図書館部門など、実に幅広い分野で同窓生が活躍しているのが、とてもよくわかる。中でも、さすがに、情報部門や図書館部門は、図書館情報大学の特色がよく現れている。一人だけでなく数人の同窓生が活躍している大学図書館の状況がわかる。

“自治体関係”では、現在は、数が少ないが、いずれ公共図書館で活躍する同窓生の投稿が増えてくるのが、大いに期待される。

“会社・事務所等”では、現在は司法書士になった同窓生の記事があるだけだが、この事務所に対する同窓生のアクセスも期待されていることがうかがえる。

“個人・趣味・サークル等”もまだ数が少ないが、「図書館映画データベース」は秀逸だ、ぜひ一読をお勧めする。高鷲会長のブログは、図書館界の現況を社会風刺的に切り取る好ページだ。トップページの“会長挨拶”からもリンクが張られている。

さて、この“会員の広場”が生命力ある生きた情報の広場になるかどうかは、ひとえに同窓生の力に負っている。一人でも多くの同窓生が、“同窓生ホームページリンク集”に登録することによってそれぞれの現況について知らせあい、情報交流と人間交流を深めてもらいたい。ブログも大歓迎だ。

同窓生の皆さん、ぜひ、“会員の広場”へ投稿してください。

その他のページもお役立ち

すべてのページを紹介する紙幅がないのが残念だが、その他のページもユニークで、面白いページが満載だ。母校のことを知りたければ“母校の今・昔”を見ればよい。大学改革で激変する昨今の母校の情報も仕入れたいものだし、また、懐かしい母校や初めて知る昔の学校の姿に、写真入りでお目にかかれるのも嬉しい。“会報”には橘会が今までに出した会報が、PDF またはタイトル一覧で載っている。“ギャラリー”では、図書館情報大学の合唱団が歌う学生歌“常陸野に”が映像入りで流れている。同窓生諸君で貴重な映像や文献を持っている方には、ギャラリーへの提供をお願いしたい。

さらに、入会したい人や、会員の住所変更などは、“入会案内”および“会員の皆様へ”のページに便利なフォーマットが用意されている。

橘会からのお知らせは、“会員の皆様へ”というページに載っている。総会の案内など、常時ここを注目しておいてほしい。

さて、最後に、この橘会公式ホームページを支えてくれているメンバーを紹介しよう。まず、このホームページの運営者は、橘会の理事会だ。理事会のメンバーは、ホームページの役員欄をみてほしい。橘会から発信する情報は、理事会のメンバーのそれぞれが、分担する内容ごとに記事を書いている。実際に、具体的な運営に当たっているのは、理事会の中の“橘会ホームページ運営グループ”〔森茜（短大別科昭 40 年）、寺沢白雄（大学昭 59 年）、市村省二（大学昭 59 年）、川本清文（大学昭 60 年）、村田輝（大学院昭 63 年）〕だ。そして、最も厄介で大変な作業量となるこのホームページのアップデートを担ってくれているのは、市村君だ。同君に多大な感謝の意を表するとともに、同窓生諸君の積極的な投稿と、忌憚のないご意見をお願いして、この「橘会ホームページ」の紹介を終わりたい。

（文責 橘会副会長 森 茜
図書館短期大学別科 第 1 期）

卒業式を迎えられた皆さんへ

卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。また、卒業生の家族の皆さんのお喜びもひとしおだと思います。誠におめでとうございます。

そして、大学におかれまして、ご指導をされてこられました筑波大学図書館情報専門学系、図書館情報メディア研究科の先生方をはじめ、教職員の皆様方にも御礼を申し上げます。

私は、筑波大学の同窓会である茗溪会の支部図書館情報学橋会の会長をしております。図書館情報学橋会は、通称“橋会”として、同窓生に親しまれております。このような立派な卒業を祝う会にお招き頂きましたことを大変感謝いたしております。会を代表いたしまして、ひとこと、皆様に卒業のお祝いと橋会のご案内をさせていただきます。

私が、小高学群長、磯谷研究科長、石井専攻長先生をはじめとする大学の諸先生方ならびに来賓の方々を前に、このような高いところからご挨拶をさせて頂ける機会を得ましたのも、現在筑波大学同窓会の茗溪会支部である図書館情報学橋会の会長という職に就かせて頂いているおかげですが、実は私は、筑波大学図書館情報専門学群の前身である文部省図書館職員養成所を卒業し、図書館短期大学図書館学科で助手を務めたことがあり、皆様方との深い結びつきを感じずにはいられません。

橋会は、図書館情報学群の前身機関であります図書館情報大学、その前の機関である図書館短期大学、そしてそれらの機関の発生の元になった大正10年に設立された文部省図書館員教習所等の卒業生が一つの組織となって活動しています。全ての学校の卒業生、修了生を合計しますと7,000名を超える同窓会組織であり、図書館界を始め、現在では、IT産業、企業情報部、その他の様々な分野で活躍されています。

筑波大学図書館情報専門学群は、2002年10

月に図書館情報大学が筑波大学に統合する際に出来た専門学群でありますので、図書館情報学橋会一同は、これまでと同様に筑波大学図書館情報専門学群が卒業生の今後ますます発展していかれることをお祈りし、期待しております。

卒業生の皆さんが、入学された大学は図書館情報大学であったと思います。皆さんは、国立大学の再編ならびに法人化という、日本の高等教育機関の大変革の時期に期せずして、それを体験され、本日、筑波大学図書館情報専門学群卒業生として巣立って行かれることになりました。図書館情報大学という名称はなくなるとはいえ、この大学の二十数年間の実績が消滅するわけではなく、すべてが筑波大学図書館情報専門学群に引き継がれたと考えています。

大正10年開設の文部省図書館員教習所から八十年あまりの年月、日本の図書館活動、図書館情報学の研究・教育を担ってきましたが、若い皆さんを迎え、今後は、21世紀のIT社会をリードしていく役割を果たしていきたいと考えています。

橋会は本年度より、正式に茗溪会支部として認められました。

本日この筑波の地から巣立って行かれる皆さんもぜひ橋会にご加入頂き、社会人となった後も、この筑波で培った人間交流の力を強め、新しい活動の糧にして頂きたく、ご協力を是非ともお願いする次第です。

卒業生の皆さんに贈る言葉として、私の好きなラグビーの言葉「One for all, all for one」をご紹介します。ご存じの方は多いでしょうが、一人一人が全力を出し、力を合わせないと試合には勝てないということを示しています。ただ一人の人間として力を備えているだけでなく、チームとしての自分がなくてはならない。チームを組むだけでなく、チームを組むそれぞれが力を備えてい

なければチームそのものも成り立たない、ことを示しています。これから皆さん、社会に出られましたら、この言葉を実感なさるのではないのでしょうか。

この大学の生活の中で、皆さんはそれぞれの年月の中で様々な知識などを獲得なさった事と思います。これから先、社会に出てからそれを実践して下さい。もちろん、挫折もあるでしょうし、行き詰まる事もあるでしょうが、それに負けずに研鑽を続け、またさらに大きな人になって頂きたい

と思います。

卒業生、修了生に方々のこれからのご健康とご活躍、ご家族の方々のご健康を祈念するとともに、筑波大学図書館情報専門学群、図書館情報メディア研究科のますますの発展を祈願してご祝辞に代えさせていただきます。本当におめでとうございます。

図書館情報学橋会会長 高鷲 忠美

遠藤龍二先生を偲んで

筑波大学図書館情報メディア研究科教授 遠藤龍二 殿(享年 65 才)は、平成 17 年 12 月 3 日(土)午前 6 時 57 分逝去されました。ここに謹んでお知らせ致します。

遠藤龍二先生

筑波大学図書館情報メディア研究科 講師
横山幹子

遠藤龍二先生がご危篤であるという連絡を受けたのは、2005年12月2日金曜日のことでした。先生がご闘病中であると存じ上げていたにもかかわらず、その知らせを受け、私は、大変びっくりしました。なぜなら、ほんの少し前、11月27日日曜日に先生からお電話をいただいたばかりだったからです。

そのお電話は、2学期の授業である「西洋史概説」のテスト結果に関するものでした。先生は、その週にご入院の予定で、ご自身で事務への成績報告ができないため、私経由で事務に成績を報告して欲しいということでした。その際、先生は、少しおつらそうではありましたが、いつも通りのしっかりしたお声で、「西洋史概説」を履修しているすべての学生の成績を私に報告なさいました。ときには、冗談も交えていらっしゃいました。そのときは、学生に不利益があってはいいけないと

いう、いつもながらの先生のご配慮だと思っていました。ですから、まさか先生がそれから一週間も経たない間にお亡くなりになるとは、夢にも思っていなかったのです。

先生は、体調が思わしくないなかで、学生のことを第一に考え、ご自身の職務を全うなさいました。「西洋史概説」の後半の授業は、入院先の病室から大学にいらして講義なされていました。そして、いつもと変わらぬご様子で、また、いつもと同じようにたくさんの資料を用意され、講義に臨んでいらっしゃいました。授業の後、なるべく早めに病院に戻らなければならないのに、研究室に質問に来た学生に、長時間丁寧に対応していたという話も後に聞きました。そして、先生は、今年度担当している最後の授業の成績をつけ終えて、2005年12月3日土曜日の早朝、お亡くなりになりました。

若輩者の私に教育者としてのあるべき姿を見せてくださったことに、感謝を込めて、最後になりましたが、先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

遠藤龍二氏のこと

筑波大学図書館情報メディア研究科 教授
都築正巳

遠藤龍二氏が昨年12月に65歳で逝去された。もう少しで定年というところで、残念なことである。2,3年前に入院されてから、闘病生活をなさっていることは薄々承知していたが、こんなにも早く死を迎えられるとは思ってもよらぬことであった。

東京大学大学院の独文科に在籍のころ、彼は私より1年先輩で、時々授業で顔を合わせる間柄であった。時々というのは私の出席率のことで、彼は毎回丹念にノートを取る勤勉な学生であった。その結果、彼は将来を嘱望されて、駒場の助手に抜擢されたが、私は地方くだりして、茨城大学に籍を置くことになり、彼とは縁遠くなった。そしてまもなく彼が千葉大学を辞職してドイツに渡ったという噂を聞き、ますます縁遠くなるのを感じたものである。その後20年近く経ってから筑波大学に非常勤で出かけるようになり、彼と再会することになったが、彼は時々顔を出して、何かと助言をしてくれた。彼は教え子に対しても非常に面倒見が良く、彼が育てた若手の研究者を、私が橋渡し役となって、茨城大学に非常勤として推薦したこともある。

その後私自身茨城大学から図書館情報大学へ移ることになったが、その頃、彼は筑波大学を辞職してドイツに渡っていたようである。そして彼が図書館情報大学に採用されてから10年ほど彼は私の同僚であり、専門分野が近いこともあって、接触する機会も多くなった。もっとも、はしご酒をしながら、夜の巷を徘徊する悪友の親密な関係にはついになることはなかった。お互いに大人になり、人間が丸みを帯びてからの紳士的な付き合いであった。彼としても職場に対する不満が特にあったわけではないし、再びドイツへ逃亡することなど考えてもいなかったらと思うから、円熟した余生を迎えるにいたらなかったのが惜まれる。

彼の人生はやはり月並みなものではなかった。

私がまずは妻子とともに平凡な人生を歩み始めた頃、彼は単身ドイツに赴いてドイツの文化に沈潜していったのだが、それはある意味で日本人でなくなる危険な冒険でもあっただろう。それは人間に宿るデーモンのなせる業で、彼はまずは哲学を生きたのである。机上の学問はどこかに嘘が入り込むが、彼はその嘘を嫌ったのである。生きることと学問することとは別物で、結局、職業としての学問の域を出るものではなかった私などから見れば、そら恐ろしいことである。論文は机上の産物だから、そんなものを山のように積み上げても空しいではないかという非難の視線も微妙に感じられたが、だからといって彼と私の人間関係が破綻することはなかった。生き方は異なったが、人生遍歴の後、同じ釜の飯を食う間柄となり、ついには彼を野辺送りする立場となった。思うに、不思議な縁であった。

遠藤先生の講義の思い出

筑波大学大学院
図書館情報メディア研究科1年

岡部晋典

学部三年のときに遠藤先生の記号論を受講したことを覚えている。池上嘉彦『記号論への招待』をテキストにした講義で、学生がテキストを輪読するというスタイルだった。なにしろ輪読であるから、当てられそうな日のみ講義に出席するなどという不届きな学生もいたようだが、結局は輪読の順番がずれたときに欠席が露呈するのである。表面的な要領の良さによって足下がすくわれる、よくできた出席確認システムだなと感心した覚えがある。

遠藤先生は輪読が終わると淡々とテキストの内容を解説されるのだが、こちらが耳を澄ませていると、淡々とした中にも先生が何を強調したいのかがだんだん分かるようになってくる。知的興奮が味わえるところでは、先生の声のトーンも一層強くなるのである。面白いことをほら面白いでしょ？と内なる情熱を込めて学生に伝えている先

生の姿勢が垣間見えた。なるほど学究とはこういう人のことを指すのか、と強く印象に残っている。とにかくテキストを大事にする方だったと思う。テキストを一行一行丹念に読み解いていく作業というのは、しばしば退屈な作業であるけれど、解答をまず与えられているような教育では絶対に味わえない最後の感動が待っている。受験勉強の名残なのか、解答や事実のみを、ただ雛鳥のように口を開けていれば与えられることに慣れきっている学生にとっては新鮮だった。一見とっつきにくくて退屈だけれども、自分の頭で考えることによってだんだん面白くなっていく、哲学・思想の性質をよくよく伝えてくれていたのだろう。学校のお勉強は嫌いだった私だが、先人の偉業に触れながら自分の頭で考える作業の面白さにとりつかれてしまい、とうとう大学院にまで来てしまった。どういう風の吹き回しか、自分でもなかなか分からないのだけれど、遠藤先生はたぶんそうなるきっかけの一つだったのだと今にしてみれば思う。ご逝去されたことは大変に残念でたまらない。

遠藤先生に宛てて

筑波大学図書館情報専門学群 2 年次
佐藤翔

授業以外で遠藤先生と初めてお話したのは新生入生向け冊子のためのインタビューに伺ったときだった。終始穏やかにこちらの質問に答えられる姿はいまだ印象に新しい。快くインタビューをお受けくださったばかりでなく、こちらの質問を先読みしてご自分の気に入った本を用意させていた。優しい遠藤先生にもう会うことが出来ないのだと思うと、寂しくてたまらない。

優しいばかりでなく責任感も強い方だった。「本当はもっと教えるべきことはいっぱいあるんだけど、時間が足りなくて」文系色の薄れつつある図情の現状を憂い、少しでも学生の教養を育もうと努力されていた。もともと今年度で退職

されるご予定。退職後について尋ねると、「私が退職しても、きちんとした人に授業を受け持ってもらえれば」と、後任について気にされていた。真剣に授業に向き合いながら、そのことをあまり表に見せない方だった。

病気の辛さを学生に見せることも微塵もなかった。「本当は歩くのが好きなんだけど、病気であまり歩けなくて」なんでもないように言った言葉の裏でどれだけの無理をなさっていたのか。それでも最後まで役割を果たされ、最後の担当授業を全て勤め上げられた後いくばくもしないうちに亡くなられた。本当に責任感の強い方だった。

旅行が好きで、知らない文化に触れることが好きだとおっしゃっていた遠藤先生。死後の世界があるかはわからないが(たぶん、宗教についての授業を担当されていた遠藤先生にもわからなかっただろう)もしあるのならば、そこが遠藤先生がまだ知らない、興味深い文化であふれた世界であることを、心から願いたい。

犀の角のように

平成 12 年度卒業 /

現在、筑波大学図書館情報メディア研究科
情報メディアシステム専攻博後 3 年在籍

永沼純也

たしか哲学史の最後の授業で、映画「十二人の怒れる男」を見せて頂いた。これは陪審員が、有罪が一見明らかな殺人事件を裁くにあたって、しかし一人が疑問を抱き、議論を通して他の十一人の認識が覆っていく法廷ドラマである。遠藤先生は、この映画を通して西洋文化の根底にあるロジック尊重の精神を感じて欲しいと言っておられた。

誤解を恐れつつあえて言うと、遠藤先生も相当に「怒れる男」だったように思う。不肖の弟子だったぼくは、ゼミの時間以外で部屋を訪れることはまれで、その時も研究の事よりも世間話の方が多かった。それでも先生は相好を崩して相手して下さった。そんな折、しばしば先生は怒っておら

れた。いつも通りのあの柔らかな物腰で、世の不正について怒っておられた。その対象は、たいていぼくがまるで知らなかった事柄についてだったが。

宗教学の講義で、釈迦の思想について「スツタニパータ」のこの一節を紹介された。

「犀の角のように、独り歩め」

ぼくにはこの言葉が、映画の内容と相まって、先生自身の独白のように思われた。

一方で、こんな事もあった。「あなたもいつかは結婚されるんでしょうから...」と言われるので「いや、ぼくはずっと独り者ですよ。気楽ですし。」と笑った。犀の角ですよ、という言葉は飲み込んだ。すると先生は、こう言われた。「ぼくもずっとそう思ってた、少し年がたってから体調を崩したのをきっかけに結婚したんですが、やはり家族というのは良いものですよ。」と、いつも以上に和やかな顔をされていた。

大病を患われてからお会いした時、「娘が成人するまでは何とか生き延びていたいと思うんですが、どうも難しいようです。」と苦笑しておられた。「いやそんなことはないですよ。顔色も良くなられてますし。」と励ましたのだが、実際それから二度「今年も何とか生き延びました」と記された年賀状を頂いた。もう大丈夫ですね、くぐり抜けられましたね、と思っていた所に訃報が届いた。

今、アルバイトで家庭教師をやっている。生徒の一人が、法律関係の仕事に就いて世の中の真実を守りたい、と志を吐露してくれた。卒業の季節、彼との最後の授業が近づいている。遠藤先生のまねごとをして、最後は「十二人の怒れる男」を見せたい。



遠藤先生，さようなら

筑波大学図書館情報メディア研究科
博士後期課程3年 吉井 均枝

遠藤先生とは、私が哲学科出身でもあり外国で勉強したということで、他の先生から勧められて、長らくドイツにいらっしゃった遠藤先生に、いろいろとご助言いただくようになりました。ドイツからお帰りになった直後のお話などは、今ほどヨーロッパが近くなかった当時の日本の研究者のご苦労が想像され、感銘を受けました。例えば、帰国直後は、アルバイトでドイツ語の通訳もなっていたとか... 遠藤先生は、エリートともいべき境遇でありながら、高きにとどまろうとするところがなく、必要なことはなんでもなさるとい印象があります。それは、先生がヨーロッパにおられたからなのか、先生本来のお姿なのかはわかりませんが、先生を深く尊敬する所以でもありました。

お会いするといつも穏やかな印象を受けましたが、信念のとおりに行動されるときには、とてもエネルギッシュな一面をお持ちで、意外な気がしたこともありました。若き日の先生は、もしかしたら、私たちがイメージしている、いかにも“教授”という遠藤先生ではなく、闘士のような方だったのかもしれない。学生に対しては、いつも真摯で、率直な態度で接してくださり、ご病気のことも隠すということもなく、でも決して、だから何かをやめよう、とはなさらず、私などがずっと以前にお願いしたことなども覚えてらして、約束を果たそうとする先生に、思わず胸がつまったことがありました。

今、先生のお姿を思い起こしてみると、昔読んだ、時間に几帳面だったカントのイメージと重なってきます。本を小脇にかかえて、天国の廊下をゆっくりと歩いていらっしゃるのでしょうか。先生、天国では無理をなさらないくださいね。

廣瀬賢次先生、安らかに

図書館情報大学名誉教授廣瀬賢次先生（享年七十六歳）におかれましては、平成十七年七月九日（土）に逝去されました。ここに謹んでお知らせいたします。

廣瀬賢次先生を偲ぶ

筑波大学大学院

図書館情報メディア研究科

教授 石井啓豊

廣瀬先生は、千葉大学医学部、同付属病院などを経て、昭和58年4月に図書館情報大学教授として赴任され、以後体育・保健センター長として、平成7年4月停年により退職されるまで、図書館情報大学の学生、教職員の健康管理を通じて大学教育に大いに貢献されまあした。

先生のご功績は何といっても体育・保健センター長として、図書館情報大学の「体育と保健に関する教育・研究・保健管理」の基盤を精力的に建設されたことです。体育・保健センターという名称が表すように、体育と保健という異なる機能を持った二つのセンターが大学の規模という観点から合体されたものですが、この殆ど前例のない組織の在り方を基礎から建設され、その結果として定期健康診断を大学行事として学年暦に位置づける、定期健康診断の平均受診率が90%を越える等、様々な功績を残されました。

また、こころの健康問題を重視し、着任当初よりセンターに精神科医師の配置に努力し、常勤の医師を配置することによって学生と教職員の精神的諸問題の解消に尽力され、図書館情報大学のこの体制は小規模大学における心身両面での健康管理体制の全国的先駆けとして高く評価されています。

学校医としての業務においても、毎年の定期健康診断においては常に陣頭指揮をとり、診断結果を厳しく吟味し、再検査や医療機関への紹介など、

責任ある処置を行っておられ、このようなことによって学生や教職員からは絶大な信頼を得ておられました。

教育の面では、主に保健体育講義を長年に渡って担当し、学生の保健にかかる教育を推進され、さらに保健教育の一環として健康教育活動や啓蒙活動にも力を注いがれました。赴任当初から学生向けの学内講演会を毎年2～3回定期的に開催する基盤をつくれ、これは図書館情報大学の閉学まで続けられました。この学内講演会は主に精神衛生と栄養管理に掛かる内容でしたが、専門家達の話によって、学生の精神衛生上の理解と実態改善、および栄養管理に対する認識の向上に目覚ましいものがありました。また学生広報誌への常設コラム欄（体育・保健センターだより）を開設し、毎号センター教職員による啓蒙の記事を連載してきましたが、これは後にセンター発行の「すこやか」として学生に配布されることとなりました。またセンター教員による公開講座の開講にも積極的に取り組み地域住民への健康教育サービスに努められました。

廣瀬先生の思い出

元図書館情報大学体育・保健センター助教授
現豊後病院医師 上月 英樹

廣瀬先生は、腎臓病学の大家でしたが、知識を振りかざすタイプではなく、静かにたたずむ古武士のような印象がありました。保健師の緒方さんと共に、私も長く職場で一緒にさせてい

ただきましたが、いつも淡々と、おだやかなご様子でした。

その一方で、腎臓病に対する啓蒙活動の一環としての授業や健康診断後再検査などでは、時に厳しい一面を見せられました。即ち、腎臓のやまいは、無痛で若い頃は尿所見のみであるが、数十年して、腎不全に陥ることもあるから、必ず定期的観察と精査が必要であるということでした。細かく検診結果を分析され、来所した学生や教職員に熱心に説いておられた姿が目には浮かびます

定期健康診断のときは、皆さんは毎年のことで、いつもの行事でしょうが、関係者にとっては一大事でした。保健師の緒方さんともども、遅くまで準備されていました。毎年、前日は、5階の研究室に泊まられているご様子でした。朝一番に、緊張した先生にお会いし恐縮したことを思い出します。つくばに住んでいる私が前の日に早く帰宅したこと、誠に申し訳ありませんでした。

健康があってこそ、大学生活です。廣瀬先生は、細かい専門性にこだわらず生涯にわたり心すべき様々な健康上のアドバイスを、されてきました。体育・保健センターだよりなどで。

退官記念年祝賀会は、筑波第一ホテル学生生活で盛大に挙行され、母校千葉大学医学部の諸先生をはじめ多数の参加者があり、先生のお人柄どおりの和やかなものとなりました。先生は、その晩、旧友と心いくまで談笑されていました。そこで、先生の偉大さや、ご業績の素晴らしさを、再認識しました。

思いでは尽きませんが、どれも楽しいことばかりです。

様々な思い出をありがとうございました。

ご冥福を心より祈っております。

廣瀬先生の思い出

元図書館情報大学体育・保健センター保健婦

緒方 蓉子

先生は糖尿病性腎症の権威で、腎症に関するご著書や研究論文を数多く発表されている。しかしそのことについてご自分から話をされたことはない。ただ一度だけ「今たまたまこの本を眺めていたら、僕の論文が引用されていたよ」と嬉しそうにかなり分厚い英書を見せてくださったことがあるが・・・先生は「能ある鷹は爪を隠す」の言葉通りのお方だったのだ。

「向田邦子さんはすごいね。一寸した時間の合間に立ったままでも冷蔵庫などを台にして原稿や手紙を書き上げたそう。僕なんて長時間机に向かっても結局何も書けないことが多いのだけど」とおっしゃったことがある。先生は読書家でいろいろなジャンルのご本を書棚に並べていらしゃった。ご自宅近くの公立図書館を利用されているお話も何度かうかがった。退官が迫って研究室の図書を整理されていた時「こんなものが紛れ込んでいました」とおっしゃって懐かしそうに一冊のノートを見せてくださった。それは先生が旧制高校の学生だったころ、ご親友と二人で伊豆地方を旅されたときの紀行日誌で、旅先の風景やそのときどきにお感じになったことなどが瑞々しく美しい文章で綴られていた。先生はなかなかの文学青年でいらしたのだろう。

先生の診察はとても丁寧であった。学生が風邪で受診した場合、まず体温を測定させるのはどの医者もすることであるが、次に両方の手首を取って脈をみる。次に両下眼瞼を下げて結膜の状態を診る。それから耳の後部から頸部にかけて両手をずらせながらリンパ腺の状態などを触診する。時には唾をゴクリと飲ませて甲状腺の動きを観察することもあった。次に口を大きく開けさせて、舌圧子と懐中電灯を使って口の中を見る。懐中電灯を殆ど口の中にすっぽり入れてしまうほど奥深くまで照らして診るのである。次に胸部の叩打音を聴く。左手を軽く左鎖骨下に当て、右手の指でとんとんと叩いては少しずつ下方に手をずら

せていき、次は右側に移る。そして最後に聴診器で心音と呼吸音を聴くのであるが、必ず胸部と背部の二面から聴診する。(背部を聴診する前にも胸部同様にまず叩打音を聴いた。)何度も「大きく息を吸って。吐いて」とおっしゃりながら、じっくりと聴診器を上から下まで万遍なく動かして聴診するのである。何か気になる音に出合ったときには、その部分に何度も聴診器を当てておられた。

寒い冬などには、受診者に不快を与えぬよう触診の前にご自分の手に息を吹きかけたり両手をこすりあわせたりして手を温めていらした姿が目につかふ。

「近頃の若い医者はろくに診察をしないで検査にばかり頼っている。」と不平をこぼされたことがあったが、先生はご自分の診察に自信を持っていらしたのだらう。

我が家の食器戸棚の中に、先生から頂いたロイヤルコペンハーゲンのお皿がある。濃いブルーと鮮やかなオレンジ色がかった赤の色合いがとても美しい花柄のお皿である。先生が退官なさる数日前に「昨日デパートに行ったら割合安く売っていたので、懐かしくて買ってきました」と言って下さった。

先生は以前デンマークに留学されていたのだ。いつ頃留学なさったのかは存じ上げぬが、「これはデンマークにいるときに買った時計です」、「これはデンマークで買ったジャンパーです」、「この写真はコペンハーゲンの街角を撮ったものです」などなどデンマークのお話をいろいろ聞かせていただいた。そんななかで、「私がデンマークで教わった先生は世界的に高名な方であるのに、定年で退官したらすっぱりと研究生

活を辞めて第二の人生を楽しみたいと言われた。日本人と考え方が違いますね」とおっしゃったことがある。先生ご自身はご自分の退官後をどのように考えていらしたのだらう。(退官直後は千葉の四街道病院長に着かれたのだが数年後に辞められたそうだ。)

先生のご消息は年一回の年賀状で知るのみであったが、ある年突如として年賀状が途絶えこちらの賀状は「宛先人不明」で返送されてきた。

昨年7月、思いがけず先生のご逝去を知らされてびっくりした。告別式に参列して先生の静かなお顔を拝見し、「まだまだお元気でいていただきたかった」と切に思ったし、いまでもそう思い続けている。

先生、いろいろな思い出をありがとうございます。ここらからご冥福をお祈りしております。



『図書館情報学橋会会報』は会員のためのメディアです。皆様からの投稿をお待ちします。思い出、近況、活動状況など原稿をお寄せください。

社団法人茗溪会支部図書館情報学橋会

〒305-8550 つくば市春日1 - 2

E-mail tachibana-kai@slis.tsukuba.ac.jp (メールアドレスが変わりました)

公式ホームページ <http://www.slis.tsukuba.ac.jp/tachibana-kai/>

発行: 2006年3月20日